

わたしたちの同窓生

《97周年》

会員数 27,490名

平成8年4月1日 現在



同窓会報

椎の樹

1996. 4. 1 第10号

発行所 群馬県立高崎女子高等学校

同窓会

高崎市稲荷町20 電話 (0273) 62-2585

発行責任者 齋藤 民

印刷所 ほその印刷



ご挨拶 同窓会長 齋藤 民

同窓会員の皆様お健やかに平成八年をお迎えの御事と心からお喜び申し上げます。

昨年私達の夢に似たような夢の様な一年でございました。勿論明るい嬉しい事もございましたが、あまりに強烈な事件に一年中振りまわされ悪い事の影響が強すぎた様でございました。本年は何卒不安の無い年でありませう様心から願っております。

同窓会もおかげ様で無事平成七年度の行事を終了し新年の行事の準備に入っております。昨年二月五日の新年会の席で阪神淡路の災害に對しご出席の皆様からいただきました。

同窓生の皆様におかれましては、平成八年をお健やかに御迎えのこととお慶び申し上げます。日頃の母校への御支援に心より感謝申し上げます。さて、今高校教育は21世紀に向けて大きく変わろうとしています。「形式的平等から実質的平等へ」「個性尊重、創造性重視」「生涯学習体系への移行」です。これまでの画一的な教育を反省し、生徒一人一人の個性を伸ばすことを重視する観点から改革が進められています。また、生涯学習体系への移行については、各高校が三年間で自己完結性を求めるのではなく、生徒が将来にわたって自己実現に向けて努力できるよう援助してやるべきです。

さらに「新しい学力観」に立った指導へと教育の基調を転換しなければなりません。言い換えれば、学校教育においては「文化の伝達機能よりも創造機能をもっと重視せよ」

した温い義援金を早速、特に激震地と思われました神戸市内の同窓生十六名の方々に送りました。幸にも被災の限度の軽い方が多くお元気な明るいお便りをいただき私共も安心したり喜んだりした次第でございます。

三月一日には新入会員をお迎えし改めて同窓生の層の厚さを感じました。五月一日の総会には多数のご参加のもと旧恩師の橋爪良恒先生のご講演をいただきました。

秋の旅行も定着いたしました。当番期と旅行委員の皆様のお骨折りで若い会員のご参加も多くなり喜んでおります。会報「椎の樹」もお早いの

という事になります。たしかに今の教育は、知識の伝達には極めて効率的です。逆に、新しいものを創造するための知恵をつけるには不向

知識も 知恵も

校長 高橋 克明



きのです。「知識は本の中に、知恵は生活の中に」と言われていますが、知恵をつけるには生活の中で直接体験をさせることが大切です。

で10号という節目を迎えました。10号記念といたしまして創刊当時から苦勞いただきました編集委員にもお集りいただき10号に到る変遷をお話し合いました。記念の記事として3面に掲載いたしました。

母校も創立百周年を三年後に迎える事になりました。百年という長い歴史を踏まえてまいりました貴い足跡をお祝いして同窓会でも何かの形で独自の記念事業を行いたいものと思っております。新年度から百年にむけて皆様のご理解とご協力をいただき準備にかかっています。

母校でも百周年記念事業が計画され皆様からの温かいご支援をお願いする事と存じます。何卒よろしく御願い申し上げます。

しかし体験教育を重視するあまり、学校で身につけるべき基礎的な知識が不十分になる危険性もあります。特に、本校のように大多数の生徒が大学進学を目指す高校にとつては、新しい学力観を踏まえつつ知恵に結びつく知識をつけさせなくてはなりません。更に言えば知識なくして知恵も湧かないし、人間性も磨けません。知識こそ「力」です。このようなことを思いつつ知識と知恵を兼ね備え、「道ばたの草花にも目を留め、大自然のすばらしさに感動し、人間の心の痛みの分かる心優しい生徒」を育てようという学校一丸となって努めてまいります。皆様方の御理解をお願いたします。

最後にになりましたが、全国各地で活躍されております同窓生の益々の御発展を祈念し、いつまでも母校への熱き想いをお寄せいただきますようお願いいたします。

同窓会総会

平成7年5月1日 母校・椎樹館にて



母校椎樹館で同窓会の総会が開催されました。朝からしとしと雨が降り肌寒い様子でしたが幹事の心配も何のその。11時の受付前から和室の其処此処に各期別毎の小さいグループができていきます。例年、総会が始まる前に集まり、いろいろ取り決めに済ませたり、お弁当を食べながら楽しく近況報告をし合う同窓生。若々しい目の輝きが魅力的です。今年も多数の方々のご出席をいただき午後1時、角田副会長の開会の辞で始まりまして。

齋藤会長のご挨拶は高女同窓会活動の今後の方向性について、また各委員会活動の仕事振りに寄せる高い評価と信頼についてでした。高橋学校長・関口PTA会長・清水教育振興会長・菊地前学校長より御祝辞をいただいた後、議事に移りました。平成6年度事業経過報告、会計決算報告、維持費報告及び会計監査報告がなされ、7年度事業計画と予算案が承認されました。続いて会報編集委員会・椎樹祭実行委員会・旅行企画委員会の各委員長から内容説明とご参加ご協力をお願いがありました。また京浜地区同窓会から林会長と当番幹事三浦さんをご出席下さった旨のご紹介があり、なごやかなうちに諸連絡が済みました。

最後に全員で校歌を合唱し、吉村副会長の閉会の辞で無事終了いたしました。(高19回担当)

入会のことば

中島千恵子 (新入会員代表)

振り返れば、本校在学三年間、様々な事がありました。諸先生方の愛情ある御指導の御陰で、本日無事卒業する事が出来ました。

そしてこれからは同窓生の一員として、長い歴史と伝統の一端を担う事を思うと背筋がピンと伸びる思いが致します。高女の同窓生としての責任と誇りを持ち、伝統を受け

新年会開催

植松美枝子 (高19回)

全国各地で十年振りの大雪山の便りが聞かれるこの冬。寒さも一休みの立春の二月四日。二百六十余名の同窓生の参加を得て新年会が高崎ビューホテルに於て盛大に開かれました。

齋藤氏会長のご挨拶により阪神大震災の義援金を受けられた同窓生からのお礼の言葉等が披露されました。続いて来賓の高橋校長・戸部教頭よりご祝辞を頂き、金古事務長の乾杯で祝宴へと移りました。しばらく歓談の後、新春にふさわしく小林悦子さん(高19)・黒崎幾子さん(高27)の二筆の「都の春」に合わせて小島臣枝さん(高19)が自作の舞。清らかな舞いと風雅な



継ぎ発展させていく様努力していく所存です。とは言え、私達はまだまだ未熟です。お世話をおかけする事も多いと思えますが宜しく御指導の程をお願い申し上げます。

宴も酣となり、自分の席を離れ旧交を暖め合う姿が見られるなか、事務局からのお知らせ、高19回から高20回への当番期の引き継ぎが行なわれ最後にいつもお若い会長の指揮で「花・校歌」を全員合唱をして、心身のリフレッシュをし閉会となりました。久しぶりにお会いした人達は、皆充実した人生が想像され、再会を楽しみに、別れを惜しみながら家路につきました。

1995年度 総会記念講演

「人生の四季」を聞いて

武井治子 (高19回)

この日、橋爪良恒先生はスラリとした長身を黒ネクタイとグレースーツに包んでご登場。ご自分の若い頃のことや、かつての高校の様子などからユーモラスに話し始められました。

「人生の四季」

生と死という重い主題も、私達にわかり易いように身近な話題をいくつも織り込んで呼びましたが、これらは人生のある時期を示す語句としても使われました。



人生の四季 橋爪良恒先生

ききました。孔子が「普通の人生もめぐる。お聞きして自然と肩の力が抜けていったような気がしました。」

井満氏にまつわるエピソードや老教師のカロケフィーバー、ご家族の方々の生活ぶりも軽妙に交えてお話し下さいました。季節のめぐりと共に人生もめぐる。お聞きして自然と肩の力が抜けていったような気がしました。

朝日が昇って夕日が沈む。太平洋側と日本海側では海と太陽の図柄の意味が違ってきます。又、知らない土地への旅は楽しいもの。でもそれはやがて帰り着く家があればこそ旅立ちとなるでしょう。

文芸欄

桂川 昌子 (高3回)

噴煙のかぶさり来るや冬の宿  
田芹摘むその人の背の母に似る  
母と居て団扇の風を通はする

原 あけみ (高3回)

迎へ盆ことばすくなくに野道行く  
巡る山暮れ薪能はじまりぬ  
青虫の寝そべる葉にも秋日射し

斎藤 亮子 (高4回)

泥眼の葵の上にめぐりあい  
しなやかにしたゝかなれ秋立つ日  
久々に母の背ホクロ冬至風呂

旅へのお誘い

平成8年度 親睦旅行のお誘い「歴史との邂逅」

東京・箱根湯本・鎌倉

日時 10月21日(日)・22日(月)【参加費 35,000円】

- 20日(日)高崎(8:00)→浜離宮=恩賜庭園=目黒雅叙園(含昼食)=東京都庭園美術館=箱根湯本温泉(泊)
- 21日(月)湯本(9:00)→北鎌倉散策=由比ヶ浜御代川(昼食)=鶴岡八幡宮=高崎(19:00)着

※申込 9月2日(月)10時~15時 母校椎樹館事務室 ☎0273(62)2585

講師紹介



角田智恵子(女39回)

講師橋爪良恒先生(昭2生)は高崎中学を経て東京大学インド哲学科を卒業され、高野山真言宗財務部長、総務部長、高野山東京別院主監を歴任現在高崎観音慈眼院住職の他、密教のちを考える会代表幹事、健康と生命を考える会会長、群馬県労働問題懇話会高崎地区会長、前橋刑務所教諭師を務めておられます。著書、なつかしきかなしきすばらしさ(昭47)心、深き底あり(昭49)ひらけいのちの花。こころで観る世界(昭59)光とひびき(平成元)おわりははじめ(平成3)その他多数。昭和26年4月から昭和28年3月まで高崎女子高校の講師を勤めておられます。

椎樹祭参加絵画展

色彩の空間に囲まれて

第13回の高女椎樹祭に今回は絵画展で参加しました。県内外で活躍している同窓生の自己表現と美の追求は、いづれも水準高く斬新であり粒ぞろいの作品が並び、好評いただきました。描きつづける充実した生活や、絵画との出会いなど、作者と交流の中で会話もはずみ、多数の方が鑑賞しました。



- 出品者 高尾 まつ(女28) 柳沢ふみエ(女28) 羽鳥 貞子(女38) 佐藤 良江(女46) 大谷 礼子(女5) 茂木富美代(女5) 田中 邦子(女7) 中金貴代子(女10) 角田由喜子(女11) 勅使川原正代(女11) 渋谷くり子(女11) 只木 要子(女11) 牧 中子(女15) 渡辺 雅子(女17) ホリコシ・キネコ(女18)

- 相京由紀子(女22) 小峯美恵子(女25) 池田晶子(女26) 田中 悟子(女27) 佐藤 恵子(女31)

京浜地区同窓会を開いて

楽満千代子(高20回)



梅雨の晴れ間の日曜日、七月二日、都庁の隣、新宿ワシントンホテルに於いて、高女京浜地区同窓会が開かれました。地下鉄サリン事件以来、オウム報道に一喜一憂、同窓会への影響が心配されましたが、高橋校長先生をはじめ、三名の先生方、高崎方面からもたくさんの方に御出席いただき、百名の笑顔に支えられ楽しく、和やかなひとときを過ごすことができました。高橋校長先生より、現在の高女の様子を伺いますと、母校が近くて、近くて遠い京浜地区におります同窓生にとり

ゆかり

女と我が家の三代記

大守有利子(高41回)

我が家に祖母、母、姉の高女先輩達が集合すると、きまってる高女に通学した思い出話で話が弾みます。いつも必ず話題になるのは校歌の話です。「朝夕窓に仰ぎ見る榛名の山の…」で始まるこの校歌は、私が小学生の頃よく祖母から聞かされたものでした。祖母が高女を卒業してから六十有余年、今でも歌詞をしっかりと覚えていて校歌を歌えるのは、高女卒業生としてのプライドと伝統の姿



後列一 高36回 尾山(大守)美奈子 高38回 高野(大守)佳代子 高41回 大守有利子 前列一 高9回 新井(斎藤)花子 高25回 大守新井清江 高26回 大守(全恒)よしの

まして、青春の三年間を過ごした高女を、それぞれ懐かしく思い浮かべ、身近に感じられたことでしょう。背筋をピンと伸ばされ、張りのあるお声の熊倉先生、母校百周年を強調しておられました。高女を愛する熊倉先生、忘れていた同窓生に呼びかけています。二十一世紀までのカウントダウンは始まりです。百周年も一九九九年、すぐそこです。アトラクションは同窓生の三宅(岡田)和子さん、J・S・パッハのゴールドベルク

# 「椎の樹」10号発刊を記念して

穏やかな小春日和の平成7年11月23日。思惟庵に正副会長・新旧編集委員・校内理事併せて17名が集い、「椎の樹」第10号を発行するにあたっての記念座談会を開きました。吉野委員長長の司会で約2時間、笑いあり、感動の涙ありで終始なごやかに進みました。以下は多くのご意見を項目別にまとめたものです。

年1月8日。朝から夕方まで会報の折りたたみ・封筒入れ・糊づけ・スタンプ押し等すべて手分けの流れ作業を正副会長・編集委員・当番幹事・校内理事が一丸となって行いました。2号以降の発送は業者に委託となりましたが、なつかしい思い出です。財政面・前述の維持費・年間千円(振込み)が総会で決定され(平成2年)皆様のご協力で会報も定期的に発行されており、また校内理事の先生方が

会計を預りご苦労戴いており、今後共よろしくお願ひ致します。編集方針・全会員に年間の同窓会活動を詳しくお伝えすること、又会員相互の交流の場となるよう、皆様からの声をできるだけたくさんお寄せ戴き、それを大切に紙面に反映させていくことを心掛けています。編集委員は年5・6回開き、委員がそれぞれの意見を出し合って協議した上で進めています。記事・号を重ねるにつれて新企画が加わりました。期別通信・地区だより・文芸欄・同好会活動・由縁・おたより・お知らせコーナー等。皆様の参加により充実してきています。反響・会員の年齢層が厚いせいか、各々ご自分に関連のある記事を興味深くご覧戴いている様子が伺えます。委員会宛に例えば、山岸松子先生の「さわらびの会」へのお問合せや、根岸美智子さんの



「おたより」への感動と援助のお申込み、「由縁」欄をずっと続けて欲しい等。又「同好会」を作りませんか?の呼びかけから現在8種の同好会が出来、楽しい活動が広がられています。遠隔地の方々からは母校への切々たる思いが伝わるお便りも頂戴しております。



## 期別活動

### 女26回「紫会」

平形 秀子

二十世紀の大部分を生きぬいて遠く遙かにふり返る時、良き学園に学び良き師良き友に恵まれた幸をしみじみ深く感じる。恒例の新年会には昨年「魚仲」で十八名、春秋の会には伊香保の「ホテル木暮」で何れも十名、出席者数は年々少なくなるもの、それだけに感慨も深く友情を交わす貴重な会であり最後に歌う校歌は昔日に立ち返らず憶いに自ずと涙ぐましくなる。幹事の石井幸枝、戸塚咲、井田千代、萩原はな様達が心をこめて会計企画運営して下さい。現同窓会長齋藤民様はクラスの代表。TVで小幡の史蹟説明をしている高橋沢様も級友。クラスで名づけた「紫会」の紫のゆかりの色によるのか

委員達への何よりの励みです。問題点・毎回宛先不明でかなりの数の会報が戻ってしまい残念です。期別幹事のチェックにも限界がありますので皆様のご一報を切望します。今後へ・会報が同窓会事業の一つの柱としてその役割を充分果たし、会員相互のより太いパイプとなれますよう今後も心掛けたいと思います。又世の中の動きに目を向け、現代に生きる同窓生の姿や地道な活動なども提起したいと考えます。皆様のお力での「椎の樹」を立派に育てて戴きますようお願い申し上げます。出席者：齋藤民(女26) 角田智恵子(女39) 榎本幸子(女44) 武井成野(女4) 吉村晴子(女5) 吉野烈子(女9) 東野芳子(女12) 岸数子(女13) 島方睦美(女15) 綱島千栄子・植原麗子・武井智子(女19) 高原京子・斎藤信子(女20) 佐俣初江(女22) 関弘子(女23) 敬称略

## 高22回 同窓会

小河原英子



十一月十二日(日)に、高崎サンプレスにて、高22回卒の同窓会を開催致しました。当時お世話になった、富所先生、北爪先生、吉田先生、小原先生、須藤先生、丑丸先生をお迎えして、同窓生一九名の参加のもとに、卒業後二十五年目にして、記念すべき第一回目のパーティーが華やかに開かれました。



## 感動の旅—— 瀬波温泉・弥彦神社への旅

### 秋の越後路を訪ねて

齊藤 信子(高20回)

穏やかな秋空の下、豪農の館は、辺りの喧騒にもかかわらず、凛とした静けさを漂わせていた。この日私達同窓生四十五名は、久しぶりの再会を喜び合い、勇躍越後路へと旅立ったのである。この館はかつての越後の大地主、伊藤文吉の屋敷で、約2万㎡の敷地に歴代当主の美術コレクションを展示した「修古館」、柱、畳、建具等全てが三角形か菱形の茶室「三楽亭」が斬新で興味深い。その後白鳥有名な瓢湖、新発田市の清水園、足軽長屋を見物した。清水園は新発田藩、溝口家の下屋敷である。泉宗智が築庭した廻遊式庭園を、木漏れ日を浴びながら歩く。お茶室で、お薄を頂き、静かな一時を過す。車中、和やかに歓談しながら夕美荘に到着。こちらは「夕映えの宿」として有名であるが、落日は雲間に隠れて見えず。一同残念がる。その代り、盛り沢山の海の幸と楽しいビンゴゲーム、歌の数々で楽しい宴会となった。翌日は村上堆朱館を訪ね、見物と買物。快晴で、汗ばむほどの陽気の中、名勝笹川流れへ。桑川魚港で遊覧船に乗り、眼鏡岩、獅子岩、恐竜岩などの奇岩に喚声上がる。鮮魚センターで買物をし、最後の弥彦村へ向かう。弥彦神社は拝殿の屋根の形が美しく、弥彦山を背景に厳かに佇み私達も敬虔な気持ちで参拝した。青春の日々を戻すことは出来ないけれど、新たなそして素晴らしい同窓生との出逢いがあった。ヘミングウェイ流に云えば、これから犯すであろう全ての誤ちに、これから出逢うであろう全ての同窓生に乾杯! 楽しく御世話して下さい。同窓生の皆様、心からの感謝と、同窓生の皆様の益々の御健勝をお祈り申し上げます。

## 同窓会だより

## 高23回 同窓会

市川志保美



平成七年八月二〇日、高崎ビューホテルに於て、六年ぶり二回目の同窓会が開かれました。七人の先生方をお迎えして、うら若き昔の乙女七十四人。久々の再会で気分はすっかり女子校生。思い出話や近況報告に花が咲き、二十四年前にタイムスリップ! 先生お一人お一人の話に聞きながら懐かしさと笑いが会場を埋めつくしました。同窓生である山崎さんの歌声が高らかに響き渡り、その美しさに一同魅了されました。その後、全員でピアノに合わせ大合唱。感極まって涙す

## 高26回 初めての同窓会

広瀬 節子



2月11日、卒業以来初めての同窓会を椎樹館で開きました。私たちは、末広町の校舎で学びましたから、移転した校舎へ来るのは初めての人がちが多勢いました。かわいいうちも、今や40歳。皆会場へ着くや否や、話に花が咲きました。5人の先生を囲み、142名もの人達が、北は東北、南は九州から集って来ました。二次会のカラオケにも、80名以上集合し、お店がパニック状態でした。なごりを惜しみながら、またの再会を約束し三々五々、家路につきました。次回は三年後? お楽しみに。

る人あり、感動の一場面でした。再会を約束し別れを惜しみつつ散会。高女の思い出の新しい一頁を飾った、そんな一日でした。

